

## 成果の説明書

(氏名) 佐藤 敦子	(学部) 経済学部 国際学科
<b>1 重要事項</b>	
<b>【研究】</b>	
① 科研費 基盤研究 (C)「芸術文化団体の社会的インパクト評価とファンドレイジングの学際的研究」の研究に取り組んでいる。コロナ禍の影響で、海外での調査を行うことが出来なくなり、国内で事例調査に注力するべく研究計画を変更した。これまでの研究成果を論文として発表した(佐藤敦子「非営利芸術文化団体による社会課題解決への取組とインパクト評価」『産業研究』第 57 巻 2 号 pp27~40、高崎経済大学、2022 年 3 月)。	
② 個人投資家のサステナビリティ選好に関する実証研究に取り組んでいる。前年度に三井住友銀行の協力のもと実施したアンケート調査の分析結果に基づき、2021 年 5 月に異文化研究学会において『投資家のサステナビリティ選好に関する国際比較研究』と題して研究発表を行った。また、同学会誌にこれまでの研究成果について論文投稿を行った(阿部圭司、水口剛、佐藤敦子、宮田庸一「投資家のサステナビリティ選好に関する国際比較研究」『異文化経営研究』18 号 pp55-68、異文化経営学会、2021 年 12 月)。	
<b>【教育】</b>	
① 令和 3 年度には、講義科目および演習講義を教室での対面形式で行うことになったが、引き続きコロナ禍の影響により、様々な制約の中で教育機会を模索することとなった。そういった中ではあるが、学外の実務家による講演会をゼミ生や担当講義科目履修生向けに行った。具体的には次の 3 件である。 a) (株) Property Innovation Consulting 山崎氏「国際サプライチェーン・マネジメントの現状と展望」(2021 年 7 月) b) 第一生命保険(株) 銭谷氏「ESG 投資における異文化理解の必要性」(2021 年 12 月) c) サンスターグループ 草野氏「ソニーとサンスター、企業文化と異文化経営」2021 年 12 月)	
② 演習 I におけるゼミ活動の一環として、日本経済新聞社主催「日経ストックリーグ」に参加した。惜しくも予備審査(書類審査)で敗退となったが、ゼミ生はコロナ禍による制約の中、合理的かつ社会的に意義のある投資テーマの確立とバーチャル投資ポートフォリオ設定に時間をかけて取組み、非常に多くの学びと気付きを得たように見受けられる。	
③ 基礎演習、演習 I のいずれにおいても、令和 3 年度は、前年度に同じく海外フィールドワークを行える状況ではなかった。新たな試みとして、2022 年 9 月には、タイ、ベトナムの日本企業の現地駐在員や現地の日本語学校とオンライン交流を行うバーチャル海外フィールドワークを 2 日間行った。また、コロナ感染症対策による様々な生活上の制限を受けたため、ゼミ合宿も行うことが出来なかった。それに変わる活動として、2022 年 1 月には 3, 4 年生合同卒業研究発表会を行った。	
<b>2 その他の事項</b>	
① 学内：高崎経済大学広報委員 (2021 年 4 月～)	
② 学外：群馬県庁 景気動向指数アドバイザー委員 (2017 年 5 月～)、川崎市文化芸術振興会議委員 (2018 年 2 月～)、公益財団法人鼓童文化財団 理事 (2019 年 4 月～)、株式会社ディー・エヌ・エー 社外監査役 (2019 年 6 月～)、川	

崎市公共施設マネジメント推進委員会ホールのあり方検討専門部会委員(2021年8月～)、株式会社経営承継支援 社外取締役 (2022年2月～)

### 3 次年度以降の計画・抱負

研究面では、令和3年度に引き続き「ESG /サステナブル・ファイナンス」「社会的インパクト評価」「文化芸術団体の社会課題解決」の研究に取り組む所存である。科研費(C)の研究課題は研究期間延長し、フィールドリサーチを更に進展させ、調査結果のとりまとめに鋭意取り組みたい。

教育面では、コロナ禍の影響により、学生の学外活動が制限される状況は継続の可能性はあるが、学生の学習効果および国際的素養を高めるべく、様々な学習機会創出に鋭意取り組む所存である。

ゼミ演習以外の担当講義科目について、国際経営、国際マーケティング、異文化経営それぞれの最新の学術的知見を盛り込みながら、学生の興味関心を高めるような教材提供に取り組む。また、学生の積極的な授業参加およびアクティブラーニングを意識して、一方通行の講義をするのではなく、学生参加型の講義運営に努める所存である。